

平成22年4月15日(水)
「犯罪からの子どもの安全」領域

第3回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム
いざというときなにが頼りかーどう身を守り、どう助けるかー
まとめ

1. 開催趣旨

領域のネットワーク活動の一環として、領域の活動に留まらず、「犯罪からの子どもの安全」の問題について広く情報発信・交換する場として、「犯罪からの子どもの安全」シンポジウムを開催した。

近年、国としても地域で子どもを守る取組みを推進しており、大人による防犯パトロールや子どもへの防犯教室などが行われているが、犯罪からの子どもの安全は、子どもが受け身の対策だけで保てるものではない。大人が子どもの安全を考えるのは当然として、子どももまたそのための能力を身につけ、さらに高めていくことが大切になる。

今回のシンポジウムでは、犯罪からの子どもの安全に向けて、子どもたちの能力をどのように引き出し、子どもを守る大人の力をどう高めるかをテーマに、4人の研究開発プロジェクト実施者による講演を実施。パネルディスカッションでは、それらの力を地域の力にどうつなげるかという視点も交え、実際に現場で毎日活動している方を含めたディスカッションを行った。また、これまでの3年間に採択した13研究開発プロジェクトによるポスター発表を行い、来場者と直接対話する場を設定した。

2. 日時

平成22年3月16日(火) 13:00~18:00

3. 場所

時事通信ホール(東京都中央区)

4. 参加者

計253名

一般受付	: 179名	報道関係者	: 10名
領域関係者	: 64名		
(ポスター発表者等を含む)			

5. プログラム

13:00～13:15 インTRODクシヨN

◇ 開会挨拶

片山 恒雄 領域総括 / 東京電機大学未来科学部 教授

◇ 領域の紹介

安藤 二香 社会技術研究開発センター アソシエイトフェロー

13:15～15:15 講演

◇ 子どもを守る組織の課題

田村 正博 早稲田大学社会安全政策研究所 客員教授

◇ 子どもたちの対人関係能力を向上させ自尊感情を育成するために

小泉 令三 福岡教育大学教育学研究科 教授

◇ 子どもを守るリーダーをどうやって育てるか

坂元 昂 社団法人日本教育工学振興会 会長

◇ 犯罪を未然に回避するコミュニケーション能力

平田 オリザ 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 教授

15:15～16:25 来場者との対話・コーヒーブレイク

◇ ポスターセッション

13研究開発プロジェクト

16:25～17:55 パネルディスカッション

◇ 子どもの力・大人の力を地域の力へ

コーディネーター：山本 俊哉 明治大学理工学部 准教授

パネリスト：池崎 守 特定非営利活動法人さかい hill-front forum 理事長

小泉 令三

坂元 昂

田村 正博

平田 オリザ

17:55～18:00

◇ 閉会挨拶

有本 建男 社会技術研究開発センター センター長

※登壇者の所属・役職はシンポジウム開催時のものです。

6. 概要

6-1. 講演

【講演1】 子どもを守る組織の課題

犯罪や非行から子どもを守るには、子どもをサポートする公的な機関の力が重要かつ不可欠である。犯罪対策の専門機関である警察での経験を踏まえながら、子どもを守る公的な機関の役割や現状、課題について紹介した。

【講演2】 子どもたちの対人関係能力を向上させ自尊感情を育成するために

非行そして犯罪に巻き込まれないためには、状況や他者の感情を理解し、自分の感情を制御すること、また自尊心を高めることが必要である。子どもへの予防教育の必要性や学習プログラム開発の取組みについて紹介した。

【講演3】 子どもを守るリーダーをどうやって育てるか

地域で子どもを守る取組みが各所で行われているが、地域の特性を踏まえて活動し、見直していくことが必要である。取組みを指導する地域の防犯リーダーの現状や課題、学習プログラム開発の取組みについて紹介した。

【講演4】 犯罪を未然に回避するコミュニケーション能力

犯罪被害の発生や拡大の防止には、子どもの知識や意識を高めるだけでなく、危険に対応できる基礎的なコミュニケーション力が必要である。演劇を用いた防犯教育プログラムの開発や指導者育成の試みについて紹介した。

※ 当日の講演内容の詳細は以下のページでもご覧いただけます。

http://www.anzen-kodomo.jp/column/kyoudou/20100316_symposium.html

6-2. パネルディスカッション

来場者から寄せられた質問への返答を中心にディスカッションを展開した。

(1) 子どもの力について

- 平田氏の講演（演劇WSを用いた防犯教育）について：
 - 状況や発生している犯罪を踏まえた防犯教育プログラム開発は可能か。
 - ◇ 要望があれば作成可能。専門家と協働しながら作っていきたい。
 - プログラムの内容が適切でないと、危険な状況を生み出してしまうのではないか。
 - ◇ 講演中に紹介した、つかまれた腕をはずす方法は、確実・絶対ではないがほぼ実施可能である。授業の中でまず体験させ、物語は子どもたちに考えさせる。正しい内容を教えている。

- ▶ 演劇 WS に参加するにはどうすれば良いか。
 - ◇ コミュニケーションティーチャー（CT）育成事業が別途進められており、そこに参加するのが近道だろう。終了すれば、JOB カードにも記載できる仕組みとなっている。
 - ▶ 従来の教育方法との違いは何か。
 - ◇ 教師が演劇 WS の経験があまりなくても、短時間でできるようにすること、他の科目とつなげて考えることが大きな違い。また、モチベーションを高めることに力を発揮できる。
 - ▶ 先進的な地域はどこか。
 - ◇ カナダである。日本でも、民主党政権の教育改革の中で必修化される方向になるのではないか。
- 小泉氏の講演の中で、教師の感想に子どもが「変わった」とあったが、実際には何が変わったのか？保護者も変わったのか。
 - ◇ 保護者の権威の捉え方が変わっているだろう。子どもについては、中学校の先生が小学校の先生に対し、話を聞けるようにして卒業させてほしいと要請しているのが現状である。
- 子どもたちが知らない人と口をきいてはいけないと指導されているところもあり、隣のおじさんが不審者と回答する子どももいる。どのように異質な大人とのコミュニケーション力を子どもは身につけているのか？挨拶運動とからめてご意見を伺いたい。
 - ◇ 挨拶運動を地域で実施している立場から言えば、小泉氏が紹介した感情をコントロールするための学習「心の信号」は、大人が受けるとよいと感じた。学校教育と地域活動との整合性を考えていくことも必要。
 - ◇ 地縁・血縁型のつながりは限界にきている。上手くいっているところはそれでもよいが、強固なつながりがいやで若者は都市に出てしまう。新しいコミュニティとして目指しているのは、様々なメニューに応じて誰かが誰かを知っているという緩やかなネットワーク。その網の目の中に防犯も入れていくという考え方である。小学校でかろうじてつながっている地域もある。
- 学校の教育プログラムで弱い部分を補っていくとの方向はよいが、それが大人の責任放棄につながりかねないとの懸念についてどう考えるか。
 - ◇ 公的機関にはそれぞれの任務があり、枠があることを認識した中で連携していくことが必要であり、また、学校教育でできること、できないことを認識した上で連携を考えるべき。学校に責任転嫁をしていくことはゆゆしき問題であろう。入口が地域防犯でも出口は地域活性ということはよく聞かれる。新しい人間関係再構築のきっかけにもなるのではないか。様々な人の参画、大人の責任、公的機関の責任、そしてそれらに過剰な期待を持たない中で考えいくことが必要。

- 子どもが危険そのものを見聞きすることなしに育ってしまうのではないか？リスクをとることによって得られるもの、子どもを放っておくことで育つ部分もあるのではないか。
 - ◇ 自己防衛力がそがれてしまうという考え方はあるだろう。一方でダメージが大きいことに直接出会ってしまう可能性がある。非常に大きな危険性については、時代に合わせて予防的に実施しておくことが必要ではないか。
 - ◇ 地域環境防犯力が大切ではないか。子どもの防犯力をつけること、大人が守ることを両立させなければならない。

(2) 大人・組織・地域の力について

- どのような方を地域の防犯リーダーとして育成すると効果的か。
 - ◇ 誰とは特定せず、それぞれの能力に適した人を選ぶこと、いろんな人に参画してもらうことが大切だろう。防犯リーダーとしての役職を持った人がその役割として動けるようになるとよい。
- 地域防犯リーダーを育てるための教材作成について、実践者の立場からどう思うか。
 - ◇ 防犯リーダーを「育てる」という表現はいかがなものか。育ててもらわなくても、自分たちの地域は自分たちで守ることが大切。「研修」には行かないが、共に学ぶ会であれば参加するだろう。
 - ◇ どんな能力が必要か、自分たちの足りない部分を補っていくための道具と考えている。地域の人から得られた能力や声を取り上げて作成しており、一緒に作ろうという精神で進めている。言葉として研修と言っているが、連携活動がとても大切であることを感じている。
 - ◇ 自己検証するためには役立つだろう。
- 現代の子どもたちは多様で異質な人々と関わる機会が不足しているが、警察は前兆事案にも対応していく方向である。子どもと異質な大人との関わりについてどう担保していくべきか？異質な人々を排除しない社会、社会的包摂を現実とするにはどうすればよいか。
 - ◇ 多様な人が地域に住むようになると、偏見も起こるようになるのは仕方のないこと。犯罪者を本当に包摂できるのか。コミュニティを再生し、コミュニケーション能力を高めていくことが求められる。
 - ◇ 異質な人々が一緒に暮らしていける社会を目指すことは取り組むべきこと。日本人の体感治安の要求水準は、何もしないでも安全、というものであり、要求水準が高すぎるのではないか。過大な幻想を持たず、やれることはやり、その前提で多様な人々に関わっていくことが大切ではないか。
 - ◇ 国が策定した「犯罪に強い社会の実現のための行動計画 2008」にも関連する記載があり大切だが、現実としてどうするかは大きな課題である。性犯罪

者登録を進める一方で受け入れる。やるべき措置をしながら進めていくことが求められるだろう。